

長野遺跡群

立 町 遺 跡

—長野立町フォレストウィングマンション新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2022年3月
長野市教育委員会

長野遺跡群

立 町 遺 跡

—長野立町フォレストウィングマンション新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2022年3月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第162集として刊行いたします本書は、長野立町フォレストウィングマンション新築工事に伴って実施した、長野遺跡群立町遺跡に関する調査報告書であります。

発掘調査では、古墳時代後期の住居址や中世の溝址等、長野遺跡群の構造を考察するうえで重要な資料が得られております。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘作業に携わっていただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和4年3月



長野市教育委員会
教育長 丸山 陽一

例 言

- 1 本書は、「長野立町フォレストウィングマンション新築工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、開発事業主体者である個人からの委託により、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）が実施した。
- 3 調査地は、長野県長野市大字長野立町976-7に所在し、調査面積は296㎡である。
- 4 発掘調査は、令和2年5月28日から6月24日にかけて実施した。また、整理調査及び報告書刊行にいたる業務は令和3年度に行った。
- 5 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター所管）で保管している。なお、本調査の略記号は、「NFTW」である。

凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要点は下記のとおりである。

- 1 本書では、検出された遺構のうちで時期・性格等が明らかなものを中心に報告した。
- 2 遺構図の方位は座標北を表している。
- 3 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経138° 30′ 00″、北緯36° 00′ 00″）の座標値（日本測地系2011）と、日本水準原点の標高を基準とした。
- 4 遺構名は、種別ごとに下記の略記号を用いて通し番号を付した。
竪穴住居跡…S B、溝跡…S D、土坑…S K
- 5 遺構実測図は、1/20で作成した原図をもとに1/80で掲載した。
- 6 遺物実測図は、原寸で作成した原図をもとに、土器1/4で掲載した。
- 7 遺物写真の縮尺は任意である。
- 8 土器実測図において、断面の  は須恵器を表す。また、器面の  は黒色処理の範囲を表す。

目次

第I章 調査経過	1	第III章 調査	5
第1節 調査に至る経過	1	第1節 調査概要	5
第2節 調査体制	2	第2節 遺構と遺物	5
第II章 遺跡の立地と環境	3	第3節 調査のまとめ	9
第1節 地理的環境	3		
第2節 調査地周辺の考古学的環境	3	写真図版	

挿図目次

図1 調査地位位置図	1	図6 2号住居址・出土土器実測図	7
図2 調査地と周辺の既往調査	4	図7 調査区全測図	8
図3 調査区全測図	5	図8 1号溝址出土土器実測図	9
図4 1号住居址実測図	6	図9 土壌・検出面出土土器実測図	9
図5 1号住居址出土土器実測図	6		

表目次

表1 検出土壌一覧表	10	表2 出土土器観察表	10
------------	----	------------	----

写真図版目次

遺構写真	11	遺物写真	13
------	----	------	----

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

調査地は、国宝善光寺にほど近い住宅街の一角にある。鉄筋コンクリート造3階建の集合住宅の建設が計画され、令和2年11月1日付で文化財保護法第93条の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」が長野市教育委員会あて提出された。当該地が「周知の埋蔵文化財包蔵地」である長野遺跡群の範囲内であることより、市教育委員会ではこれに対して「発掘調査」の保護措置を指示した。埋蔵文化財の包蔵状況を確認するために令和2年2月6日に試掘調査を実施したところ、事業予定地南側では現地表下45cm、中央では40cmでそれぞれ遺物包含層が確認された。この結果に基づき保護協議をすすめ、開発区域の全域940.46㎡を保護対象地域とし、その中で埋蔵文化財に直接影響のある範囲296㎡を発掘調査対象として、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。令和2年5月15日付で開発事業の主体者である個人と埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、現地での発掘調査は令和2年5月28日から6月24日までの28日間実施し、報告書作成に伴う整理作業は令和3年度に実施し、本報告書の刊行に至った。

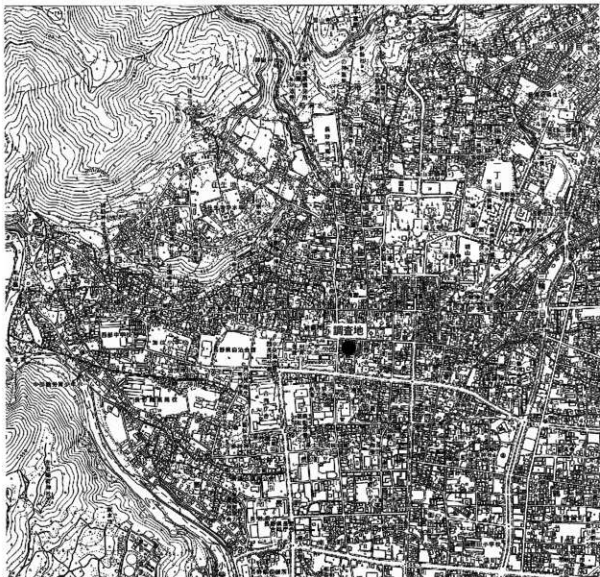


図1 調査地位置図(1:20,000)

第2節 調査体制

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤 守 (～R2)	丸山陽一 (R3～)
総括責任者	"	教育次長	樋口圭一	
総括管理者	長野市教育委員会文化財課	課長	小柳仁彦 (～R2)	前島 卓 (R3～)
調査責任者	長野市埋蔵文化財センター	所長	大井久幸	
調査担当者	"	課長補佐	飯島哲也	
調査機関	"	庶務担当	係長 小林晴和 (～R2)	
		事務職員	宮本博夫	
		事務職員	平林満美子	
		調査担当	係長 風間栄一 (R3～課長補佐)	
		主事	小林和子	
		研究員	遠藤恵実子 (主任調査員～R2) 小野涼香 (調査員～R2)	
			清水竜太 田中暁穂 篠井ちひろ 井出靖夫 伊藤 愛 (～R2) 千野 浩 (R3～)	

発掘調査員 向山純子

発掘補助員 後藤大地

発掘作業員 岩井博芳 植木義則 上原律江 金井 節 月岡純一 青山三枝子 内田正征 大日方 孝
杉本千代 中村泰明 宮尾弘子 渡辺由美

整理調査員 青木善子 市川ちず子 鳥羽徳子 半田純子 武藤信子

整理作業員 飯島早苗 清水さゆり 西尾千枝 待井かおる 宮島恵子 三好明子

測量業務委託 株式会社 写真測図研究所

本体工事請負者 株式会社 フォレストコーポレーション



調査風景

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

調査地は裾花川の段丘と湯福川扇状地によって形成された複合地形の上に立地する。現在の裾花川は、近世に瀬直しされているが、それ以前は旭山北麓の里島付近を扇頂に南東方向に広がっていたと想定される。

長野遺跡群はこの裾花川の扇状地を望む河岸段丘上に位置し、また箱清水北西を扇頂とする湯福川の急傾斜扇状地として押し出された台地・丘陵地にあたる。砂・礫の堆積物を地盤とする水はけの良い沖積土壌と、日当たり良好の南下がりの緩斜面という条件から、各時代において居住に適した環境であったと想定される。これまでの調査によって、長野遺跡群内では縄文時代から古墳時代までの居住遺構を確認しており、調査地周辺には善光寺造営以前から集落が展開していたことが判明している。

善光寺造営後には、善光寺門前町跡の発掘調査において、地割の痕跡と想定される中世の溝址などを確認しており、善光寺の発展とともに中世以降広範に大規模な造成が進められたことが想定される。近代になると門前町の繁栄とともに行政機関の建設など急速な市街地化が進行し、人為的な造成による地形の改変もさらに進化したものと思われる。

第2節 調査地周辺の考古学的環境

長野遺跡群周辺は、善光寺門前町に加え明治期以後県庁所在地となり行政機関が集中するなど市街地化が急速に進行したため、個別の遺跡範囲はもとよりその分布状態すらも不明確な状況であると言わざるを得ない。以下、近辺の調査状況を概観し周辺の考古学的環境としたい。

① 元善町遺跡 善光寺大本願照殿建設地点

宝永4年(1707)に現在地に善光寺本堂が移築される以前、本堂(如来堂)が存在したとされる元善町遺跡であるが、この調査が善光寺境内域における初めての正式な発掘調査となった。堂宇などの建物に関わる遺構は検出されていないが、最下層の遺構検出面からは多量の布目瓦を含む層が検出されており、中世の善光寺再建に伴う地盤造成面の可能性も指摘されている。同層中より文字瓦や単弁六弁蓮華文軒丸瓦(湖東式)が出土している。

② 元善町遺跡 善光寺仁王門東地点

個人住宅建設に関わる調査で、中世初期に造成されたと考えられる盛り土と石積、礎石状遺構が検出されている。古代にさかのぼる可能性のあるものとして、漆喰の壁土片や塑像と考えられる土製品が出土している。

③ 善光寺門前町跡 八幡屋礮五郎大門町店地点

店舗建設に関わる調査で、中世後期の溝址と小穴が検出され、中世後半の比較的短期間に構築され埋没した遺構ととらえられている。

④ 善光寺門前町跡 八幡屋礮五郎大門町店増築地点

中世～17世紀代、18世紀代、幕末から近世の3面の遺構面が確認されており、中世の溝や近世の建物址が検出されている。

⑤ 善光寺門前町跡 竹風堂善光寺大門店地点

13～14世紀の遺物が出土した東西方向に延びる幅2.5mの溝址は、後述する西町遺跡で検出された東西方向、および南北方向に延びる2本の溝址と同時期に造成された性格を同じくする溝址と考えられ、中世における広範にわたる門前町の区画造成が想定されている。

⑥ 善光寺門前町跡（仮称）善光寺門前町店舗併用住宅地点

近世では町家の一部と考えられる礎石状遺構を、中世では時期の異なる2条の溝址が確認されている。

⑦ 西町遺跡

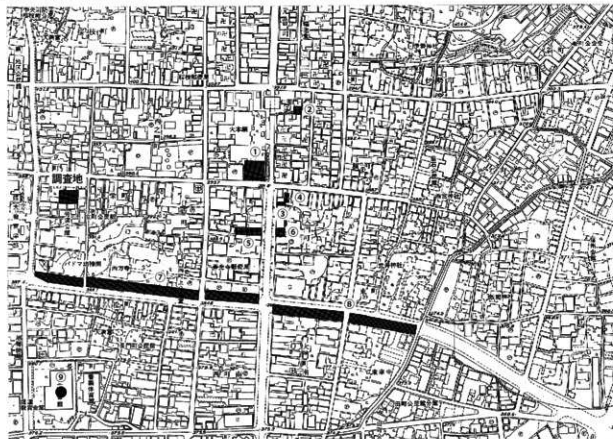
道路改良事業に伴い実施された調査で、最も古い遺構は縄文時代中期後半まで遡り、その後は弥生時代中期と古墳時代に集落が展開する様相が確認されている。中世の遺構は、善光寺参道（中央通り）に面する大門地区に集中する。13世紀から15世紀後半に相当する遺物とともに溝址や土壇、半地下施設を確認している。溝址の中、幅約3.1mで東西方向に延びるASD2と、幅約4mで南北方向に延びるCSD1は竹風堂善光寺大門店地点で検出された溝址との関連が考えられ、中世の善光寺門前町の区画造成に関わるものと想定されている。

⑧ 東町遺跡

西町遺跡同様、道路改良事業に伴い実施された調査で、弥生時代中期から近世に至る遺構が検出されている。遺跡が扇状地の端部傾斜地に位置するため、弥生・古墳時代の遺構は、湯福川の氾濫堆積土によって地表下2m以上も埋没していた。堆積土下層には弥生・古墳時代の住居址が36軒検出されているが、堆積土上層の中世・近世の遺構は土壇・小穴などわずかな遺構を確認するにとどまった。

⑨ 旭町遺跡

市立図書館建設に伴い実施された調査で、縄文時代中期の住居址2軒、埋裏、土壇、古墳時代以降の住居址4軒などが検出されている。縄文時代中期の墓壇と思われる土壇からタカラガイを模した土製品が1点、また同じく中期の埋裏から、秩父山系起源の千枚岩質粘板岩製の未使用の打製石斧7点が一括で出土するなど、縄文時代における広域の流通ネットワークを探るうえで好材料を提供している。



①元善町遺跡（大本願明照殿地点） ②元善町遺跡（仁王門地点） ③善光寺門前町跡（八幡屋碓五郎大門町店地点） ④善光寺門前町跡（八幡屋碓五郎大門町店増築地点） ⑤善光寺門前町跡（竹風堂善光寺大門店地点） ⑥善光寺門前町跡（仮）店舗併用住宅地点
⑦西町遺跡 ⑧東町遺跡 ⑨旭町遺跡

図2 調査地と周辺の既往調査（1：500）

第3章 調 査

第1節 調査概要

実質調査面積は296㎡と狭く、また全体に近代の擾乱が著しい調査区であったが、遺構検出面は1面で、古墳時代と平安時代の住居址各1軒、北西から南東方向へ直線的に伸びる奈良時代末期の溝址1本、何らかの遺構と想定される土壌15基、小穴等を検出している。中世前半に比定される土器皿（カワラケ）も遺構外より出土しており時期不明の土壌や小穴の中には中世に属するものがある可能性も想定される。遺構の密集度はやや希薄ではあるものの、本調査地周辺にも古墳時代以降集落が展開していることが確認された。

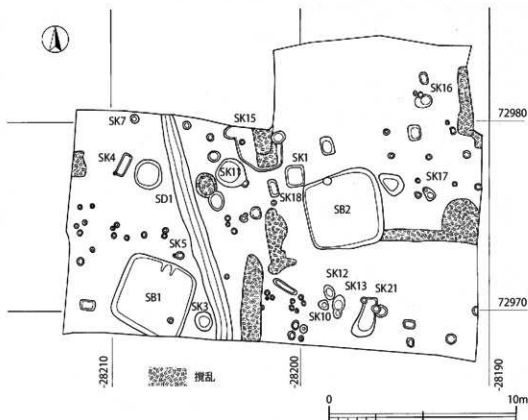
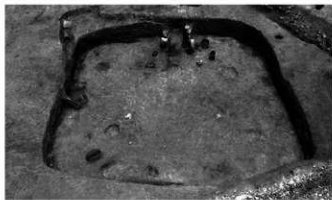


図3 調査区全測図 (1:200)

第2節 遺構と遺物

1号住居址 (図4・5)

調査区南西隅にて検出された住居址で、4.0×4.0mの隅丸方形を呈する。住居址主軸は北東方向にとり、南東隅は一部調査区外となる。確認面からの掘り込みは35cm前後である。カマド付近と住居址南東隅を除いて深さ10cmほどの壁周溝が巡る。カマドは奥壁中央付近に位置し、石芯製のカマドである。煙道の遺存状況が良く、排煙



1号住居址

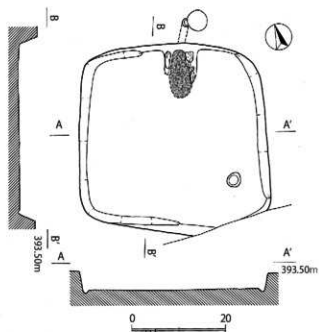


図4 1号住居址実測図(1:80)



1号住居址カマド

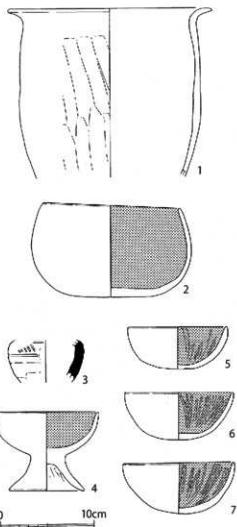


図5 1号住居出土土器実測図(1:4)

口は、壁外55cmのところに確認されている。カマド周辺の床面上より、土師器甕(1)・鉢(2)・高坏(4)・坏(5~7)が出土している。本住居址に伴う柱穴等その他の施設は確認されていない。出土土器の様相より古墳時代後期の所産と考えられる。

2号住居址(図6)

調査区中央やや東側に検出された住居址で、4.10×4.00mのやや不整な隅丸方形を呈する。確認面からの掘り込みは、遺存状況の良い北側では40cm前後、南側では20cm前後である。床面は住居址西半では明確に確認されたが、東半は礫混じりの地山層を掘りめぐっているためきわめて不明瞭なものとなる。カマドは残存していなかったが、奥壁中央西側の部分に焼土の堆積が確認され、さらにその前面に炭化物の堆積が確



2号住居址

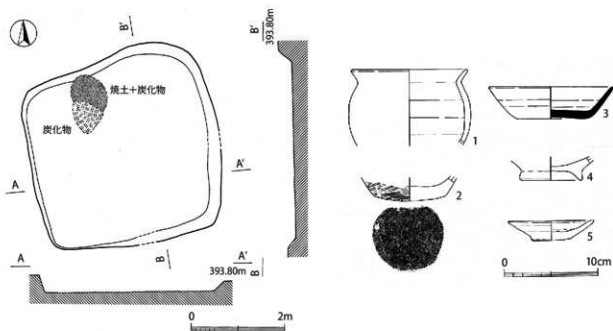


図6 2号住居址実測図(1:80)ならびに出土土器実測図(1:4)

認されており、カマドの痕跡と判断される。本住居址に伴う柱穴等その他の施設は確認されていない。

出土遺物には土師器甕(1・2)、須恵器環(3)、土師器高台椀(4)、カワラケ(5)がある。(5)は中世前期に比定され混入と判断される。出土土器の様相より本住居址は平安時代の所産と考えられる。

1号溝址(図8)

北北西から南南東へ直線的に伸びる溝址で、両端はともに調査区外となるが、長さ約12.5mにわたって検出した。他遺構との切り合い関係はない。上面幅は70~100cmと広狭があるが、100cm前後のところが多い。断面は緩やかなV字型をなし、確認面からの掘り込みは40cm前後である。覆土上層には拳~人頭大の礫とともに多量の獣骨が廃棄された状態で出土している。正式な鑑定は行っていないが、その形状や大きさからウシ科動物の骨である可能性が高い。

覆土内より須恵器を主体とした鉢や環類が比較的多量に出土しており、出土土器の様相から奈良時代末期の所産と考えられる。



1号溝址

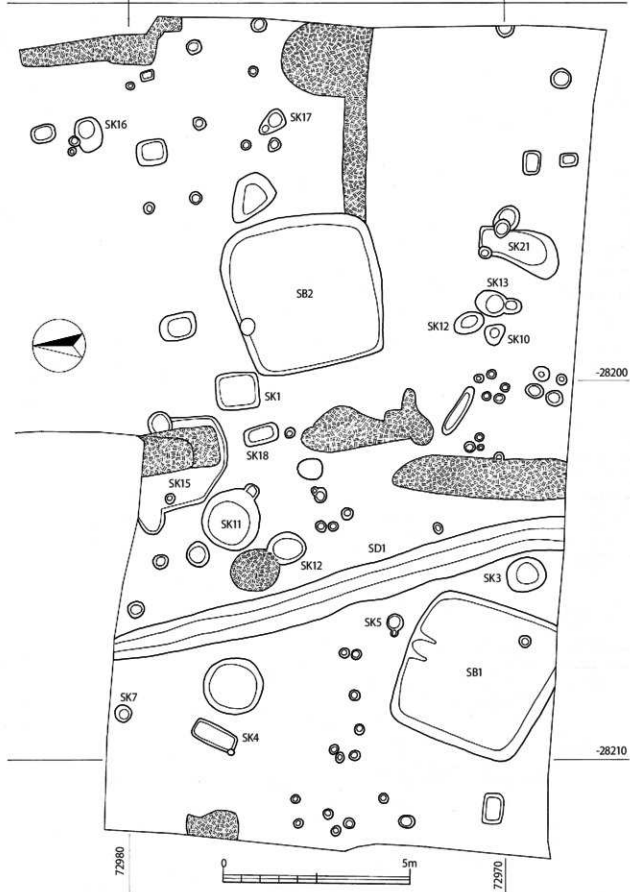


图7 調査区全測図 (1:100)

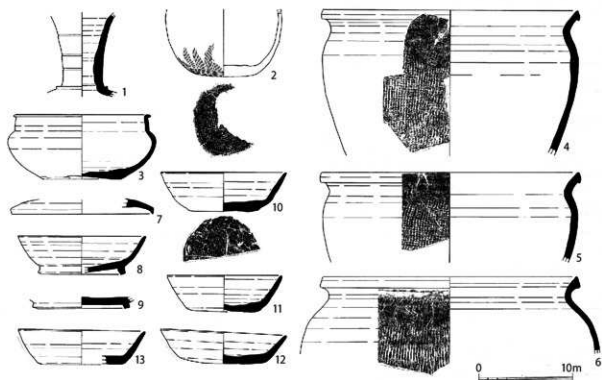


図8 1号溝址出土土器実測図（1：4）

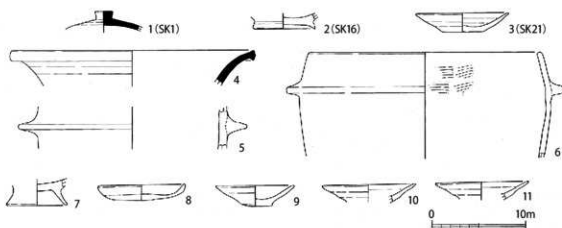


図9 土壌・検出面出土土器実測図（1：4）

第3節 調査のまとめ

実質調査面積は296㎡と狭く、全体に近現代の攪乱が著しい調査地点ではあったが、古墳時代後期住居1軒、平安時代住居1軒、奈良時代末期の溝址1本、土壌15基、多数の小穴を検出した。中世善光寺門前との関係が想定される遺構は確認されなかったが、遺構外からではあるが中世前半に比定されるカワラケも出土しており周辺に中世遺構が存在する可能性も想定される。近接する西町遺跡の調査成果からは周辺には弥生時代中期以降集落が展開することが確認されているが、今回の調査では遺構の密集度もやや希薄であり、その意味では集落域の端部に位置する可能性が想定される。調査地周辺は明治以降市街地化が急速に進行したために遺跡範囲はもとよりその内容も不明確な状況であり、その意味では貴重な調査成果といえよう。

表1 検出土壌一覧表

No	形態	規模 (m)	深さ (cm)	時期	備考
SK 1	圓丸長方形	1.15×0.90	20	平安	
SK 2	楕円形	1.05×0.80	28		一部擾乱受ける
SK 3	円形	1.05×0.93	32		
SK 4	圓丸長方形	1.15×0.65	20		
SK 5	円形	0.40×0.45	36		1号住居址煙道を切る
SK 7	円形	0.50×0.45	25		
SK 10	不整形	0.6	28		
SK 11	円形	1.55×1.50	24		
SK 12	楕円形	0.85×0.55	22		
SK 13	円形	0.75×0.70	20		
SK 15	不整形	2.35×(2.00)	10		
SK 16	楕円形	0.95×0.70	23	平安	
SK 17	楕円形	0.80×0.60	17		
SK 18	圓丸長方形	0.95×0.55	25		
SK 21	不整形	2.20×1.05	20	中世	

表2 出土土器観察表

No	種別	器種	出土層位	法量 (cm)			調整・文様
				口径	底径	器高	
1号住居址							
1	土師	甕	覆上	21.0			外面：ヘラケズリ 内面：横ナデ
2	土師	鉢	床直	14.2	7.1	9.7	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ→黒色処理
3	須恵	罐	覆上層				外面：ロクロナデ→ヘラケズリ ハケ連続刺突
4	土師	高台	床直	10.9	7.7	8.4	外面：ヘラミガキ 環部内面：ヘラミガキ→黒色処理 脚内面：ヘラナデ
5	土師	環	床直	10.4		4.5	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ→黒色処理 放射状暗文
6	土師	環	床直	11.6		5.4	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ→黒色処理 放射状暗文
7	土師	環	床直	11.3		5.1	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ→黒色処理 放射状暗文
2号住居址							
1	土師	甕	覆上	12.1			ロクロナデ
2	土師	甕	覆上		7.5		外面・底面：ハケ(カキメ的) 内面：横ナデ
3	須恵	罐	覆上	13.0	7.5	3.4	ロクロナデ 回転糸切り
4	土師	高台椀	覆上			6.5	摩耗詳細不明
5	土師	環	覆上	9.1	4.2	2.1	ロクロナデ 回転糸切り
1号溝址							
1	須恵	長頸瓶	覆上層				ロクロナデ 沈線3
2	土師	甕	覆上層		6.4		外面・底面：ハケ(カキメ的) 内面：横ナデ
3	須恵	鉢	覆上層	14.4	8.4	6.8	外面：ロクロナデ 底部周辺のみケズリ 底部：静止ケズリ 内面：ロクロナデ
4	須恵	甕	覆上	27.0			ロクロナデ 格子タタキ
5	須恵	甕	覆上	27.1			ロクロナデ 格子タタキ
6	須恵	甕	覆上	26.8			ロクロナデ 平行タタキ
7	須恵	蓋	覆上層				ロクロナデ
8	須恵	高台環	覆上層	13.4	9.2	4.0	ロクロナデ 底部：回転ケズリ
9	須恵	高台環	覆上層		10.2		ロクロナデ 底部：回転ケズリ
10	須恵	環	覆上層	13.2	7.5	4.2	ロクロナデ 底部：静止ケズリ→ナデ ヘラ記号
11	須恵	環	覆上下層	12.0	7.7	3.9	ロクロナデ 底部：静止ケズリ→ナデ 打明皿に転用
12	須恵	環	覆上層	13.3	8.8	3.3	ロクロナデ 底部：静止ケズリ
13	須恵	環	覆上層	13.3	9.0	3.6	ロクロナデ 底部：静止ケズリ
土壌・検出面上出土器							
1	須恵	蓋	覆上				ロクロナデ→回転ケズリ
2	土師	高台椀			6.6		内面：ヘラミガキ
3	土師	皿		9.9	4.5	2.0	ロクロナデ 底部：回転糸切り
4	須恵	甕		25.5			ロクロナデ
5	土師	羽釜					ヘラナデ→ナデ
6	土師	羽釜		24.4			ヘラナデ→ナデ
7	土師	高台椀			4.5		ロクロナデ
8	土師	皿		9.0		1.7	手づくね
9	土師	皿		8.3	3.4	2.2	ロクロナデ 底部：回転糸切り
10	土師	皿		9.9			ロクロナデ
11	土師	皿		9.9			ロクロナデ



調査区全景



調査区遠景



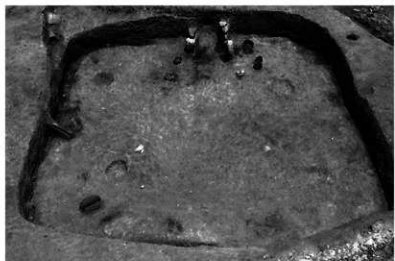
調査区全景（北より）



調査区全景（西より）



調査区全景（東より）



1号住居址



1号溝址上層



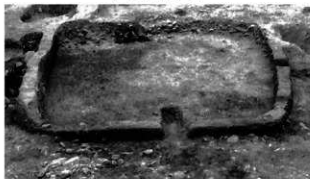
1号住居址カマド



1号溝址



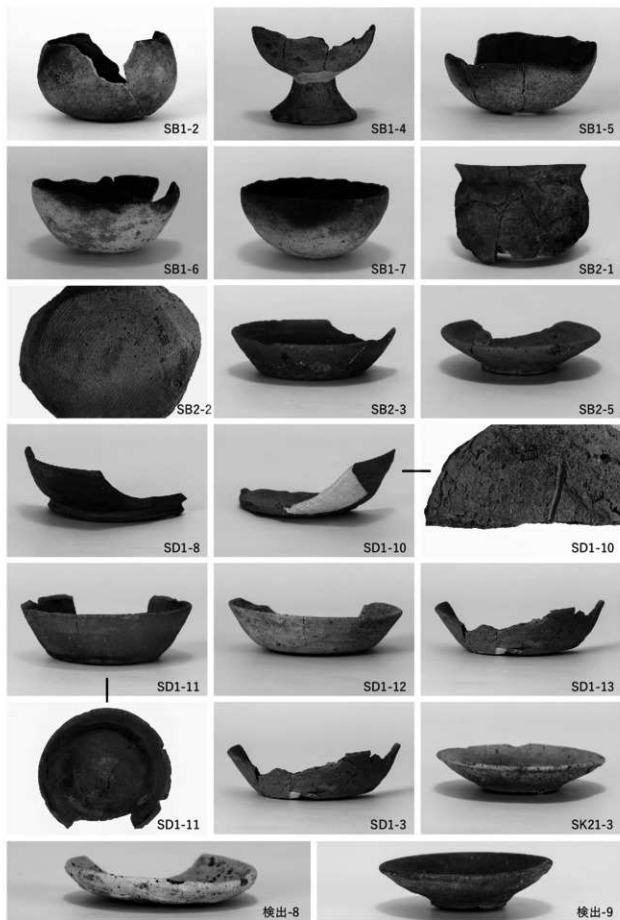
1号住居址カマド



2号住居址



1号溝址



報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん たつまちいせき							
書名	長野遺跡群 立町遺跡							
副書名	長野立町フォレストウィングマンション新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第162集							
編集者名	千野 浩							
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106							
発行年月日	2022年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ながのいせきぐん 長野遺跡群 たつまちいせき 立町遺跡	ながのいせきぐん 長野県長野市 おおいまのまち 大字立町 976-7	20201	C-026	36° 39′ 26″	138° 11′ 04″	20200528 ～ 20200624	296㎡	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
立町遺跡	集落跡	古墳時代後期	竪穴住居址	1軒	土師器・須恵器			
		奈良時代	溝址	1条	土師器・須恵器			
		平安時代	竪穴住居址	1軒	土師器・須恵器			
		時期不明	土壇 小穴	15基				
要 旨	古墳時代後期住居址1軒、平安時代住居址1軒、奈良時代溝址1条、土壇15基などを検出した。遺構外からではあるが、中世前半に比定されるカワラケも出土しており、周辺に中世遺構が存在する可能性も考えられる。遺構の密集度は希薄であり、集落域の端部に位置するものと想定される。							

長野市の埋蔵文化財第162集

長野遺跡群

立 町 遺 跡

令和4年3月31日 発行

発 行 長 野 市 教 育 委 員 会

編 集 長 野 市 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

印 刷 有 限 会 社 ア ッ ツ ー ロ

